

神奈川県におけるハクビシンの生息状況 (補遺)

中 村 一 恵

Kazue NAKAMURA: Additional Occurrence Records of Masked Palm
Civet (*Paguma larvata*) from Kanagawa Prefecture

神奈川県においてハクビシンの生息が確認されたのは1958年西丹沢における記録が最初である。発見後20年ほど経過した1980年頃から各地でハクビシンの存在が目立つようになり、1985年頃までには相模川以西の県西部のほぼ全域に分布を拡大させたと考えられる(中村・ほか, 1989)。最近になって相模川以东の藤沢市および鎌倉市からハクビシンの生息および繁殖に相当する記録が得られ、さらには横浜市からも記録された。これらの記録を前報(本誌10号)の補遺として報告し、あわせて相模川以东へ進出したハクビシンの由来について考察する。

野毛山動物園の大坂豊氏は藤沢・横浜からの記録をご教示下さり、藤沢の標本を調査する機会を与えて下さった。茅ヶ崎市文化資料館の平野文明氏からは茅ヶ崎市におけるハクビシンの生息状況についてご教示いただいた。鎌倉市在住の土屋千代子さんは得難いハクビシンの生態写真を提供下さった。本文に入る前にこれらの方々すべてに対し衷心より御礼申し上げる。

横浜・藤沢・鎌倉からの記録について

第1例: 1989年5月17日。横浜市旭区若葉台1-13-1 若葉台東中学校のグラウンド内に現われた雄成獣が、同校の教師と生徒によって捕らえられた。

第2例: 1986年10月22日。藤沢市大庭台谷戸稲荷。タブの木の下に落ちていた雄幼獣が神奈川ニュースディレクター細身吉夫氏によって拾得された。死後5~6日経過と推定された。頭胴長227mm。尾長168mm。体重349gr(図1)。

第3例: 1989年10月29日夜、鎌倉市植木19-1において2頭が土屋千恵子さんによって目撃・撮影された。2頭とも幼獣で、人をあまり恐れる様子はなく、足元まで寄ってきたという。そのうちの1頭がカメラに収

められた(図2)。

以上のうち、藤沢市および横浜市における記録はいずれも横浜市野毛山動物園が保護受けしたものである。これらの記録は、1989年10月29日付読売新聞横浜版と湘南版に報道された。その際、読者からのハクビシンの情報提供を呼びかけたところ、17件の情報が筆者に寄せられた。第3例の鎌倉の記録はそのうちの1つである。17件の内容は、横浜市7件、藤沢市4件、厚木市2件、川崎市、鎌倉市、相模原市、小田原市各1件であった。ハクビシンと考えられた情報は17件のうち7件であり、残り10件は明らかにタヌキであったか、もしくは両者の区別のつかないものであった。ハクビシンのものと考えられた7件のうち、厚木市2件、相模原市、小田原市各1件の計4件の情報はほぼ間違いなくハクビシンのものであった。これらの場所はすでにハクビシンが進出している地域である。残り3件のうち、確実にハクビシンのものであったのは前記した鎌倉市からの1件のみであった。

静岡の例では、親の留守の間に木のウロから捕獲された幼獣の体重は約300grであり、生後約1ヵ月と推定されている(Torii & Miyake, 1986)ということであるから、藤沢で拾得されたものも、体重から推定してほぼそれ位の年齢であったと思われる、まだ親の保護を受けていたのであろう。鎌倉のものも写真から判断して明らかに幼獣である。横浜については明らかではないが、藤沢および鎌倉の一部ではハクビシンは繁殖しているものと考えられる。

相模川以东におけるハクビシンの分布について

1980年以後の神奈川および隣接する東京におけるハクビシンの発見位置を図3に示す。

東京においてハクビシンの生息が確認されたのは

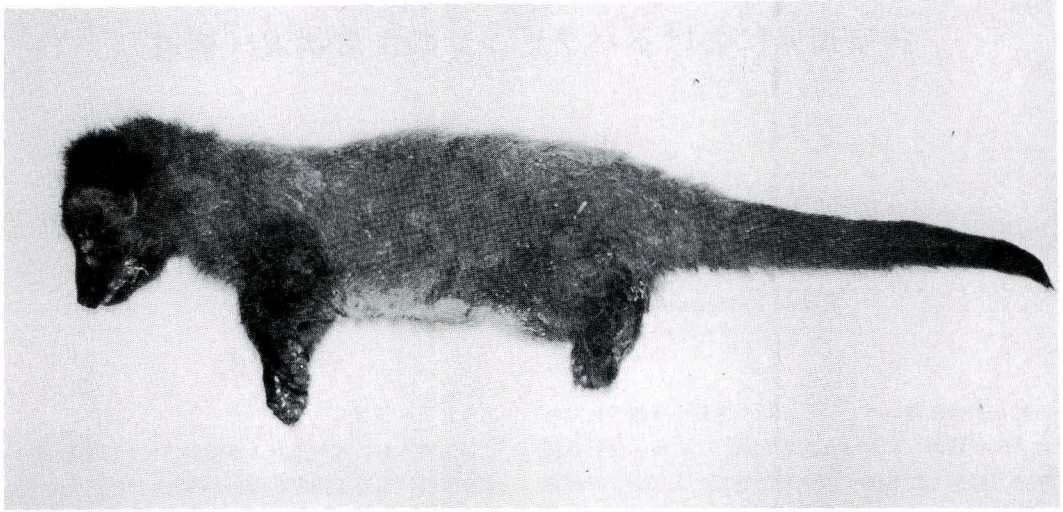


図1 藤沢市で拾得されたハクビシン幼獣（筆者撮影）



図2 鎌倉市で観察されたハクビシン幼獣（土屋千恵子氏撮影）

1975年の西多摩郡檜原村からであり、金井（1985；1988）によると、ここでの生息の報告を受けた後の5年間はまったく情報がなかったが、1980年1月に高尾山麓で姿を見たという話があってからの7年間に生息確認の情報は39件に達した。中でも最近の2年間はすさまじく、20件の報告が集まった。高尾山からの報告

は19件で圧倒的に多く、それも最近2年間に急増し、報告例は15例にもなったという。東京では1980年以降ハクビシンの急激な分布拡大があったようであり、現在までに檜原村のほか、奥多摩町、西多摩郡五日市町、青梅市、八王子市、町田市、東久留米市から記録され、分布は4市2町1村に及んでいる。八王子市では1984年9月野猿峠で、町田市では同じく1984年5月成瀬で記録された。いずれも交通事故死例である。

金井の記録を整理すると、檜原村（1975）、高尾（1980）、八王子市（1984）、町田市（1984）方面へと、ほぼ年代順に西から東へと移っているから、東京のハクビシンは多摩川水系にそって西部域から東部へ進出していったと推定できる。

神奈川県北西部においても、1985年3月には相模原市田名でも発見され、88年までにはさらにこれらの地域より南に位置する地域でハクビシンが記録された。相模原市相武台、座間市座間公園などからの記録がそれである（中村・ほか、1989）。横浜市旭区からの1例は、1984年発見の町田市成瀬に近い位置にあるから、東京からの進入も考えられる。

一方、南部域ではどうかというと、平塚市からの最初の記録は1982年、大磯町から最初の記録は1985年であり、いずれもそれらの地域の西部域から得られている（中村・ほか、1989）。大磯町では1989年現在全町的な分布の広がりが認められている（中山・槐、1989）。図3に示されたように現在の分布は相模川下流西岸域まで達している。

う。1987-88年にはすでに座間付近まで南下していたから、87年頃に藤沢に達していたとみても不自然ではない。

以上を総合して考察するならば、藤沢や鎌倉に出現したハクビシンは相模川下流域を越えてきたものではなく、相模川東岸沿いに県北部域より南下してきたものであろうと考えられる。下流ほど河幅は大きくなる。平塚や大磯の個体群にとって相模川下流域は直接的な東進の妨げになっているものと推定される。前記した茅ヶ崎市での未発見がそのことを物語っているように思われる。しかし今後藤沢市で広がれば当然茅ヶ崎市へも分布は波及するであろう。

総 括

現在のハクビシンの分布(図3)を見ると、大きくは、早川水系、酒匂川水系、相模川水系の3つに分けられる。それらの分布パターンはほぼ水系に沿った様相を示している。このことはハクビシンの生態に関係したことであると思う。一言で言ってしまうと、ハクビシンの主な生活場所は、川、谷川などからあまり遠く離れていない藪、灌木林、雑木林などである(古屋, 1976)。こうした場所は昼間寝ていることのできる休み場所として、また子育ての場所となる岩穴が多くあって繁殖に適していると土屋は示唆している。

ハクビシンの習性を考慮に入れながら、前報(本誌10号)および今回の調査結果を総合すれば、本県への進入は少なくとも三波にわたって行われたものと考えられる。

既報したように、神奈川への最初の波及は静岡側から西丹沢へ行なわれ、次いで箱根へ入ったと考えられる。前者は1950年代、後者は1960年代と推定された。これらを進入の第一波、第二波とそれぞれ呼ぶならば、第三波は県北西部へ行われたと考えられる。おそらくは山梨県側からの波及である。前述したように、東京での最初の生息確認は1975年の山梨に隣接した檜原村からのものであり、相模湖に隣接する山梨県大月市からも生息記録がある(飯室, 1975)ことから推定して、第三波はおそらく1970年代に行われたであろう。

ハクビシンは季節的に生息場所を大きく移したり、かなり広い範囲を何日もかけて動き回り、適当な穴を見つけてはそこに泊まるという生活をしている可能性が高い。ふつうは単独か、せいぜい親子づれなどの2, 3頭以内の小群で行動していると考えられる。また、冬季には10数頭が1つの穴で見つかることから、個体間での排他性はそれほど強くないと考

えられている(古屋, 1976)。群れを作れば、一定の行動域を守ってその外に出たり行動域を拡張することに保守的となるが、ハクビシンは群れを作らず、かつまた定住性も弱く個体間に排他性がそれほど強くないなどの性質をもつ。そうであればハクビシンのこうした性質が分布を広げるうえで有利に働いているだろうと古屋は示唆している。

ハクビシンの習性を考慮しながら、もう一度分布図を見るならば、以下のような推理が可能である。

第一波は、西丹沢から酒匂川水系沿いに南下して小田原に達し、その後東進して大磯丘陵に広がり、第二波の箱根群は早川水系沿いに東進して酒匂川以西の小田原地区に達した。北西部の第三波は、桂川に沿って山梨側から東進して一部は多摩川水系に沿って東京都西部へ進入し、一部が相模川水系沿い東進して神奈川県西部へ入った。神奈川に入った個体群は相模川東岸域をさらに南下して湘南地域に達した。今回の藤沢・鎌倉からの発見例がそれである。今後ハクビシンは横浜および川崎西部に広がるであろうし、ごく近い将来に鎌倉から三浦半島に分布は波及するであろう。

文 献

- 古屋義男, 1976. ハクビシン. 四手井綱英・川村俊蔵編「追われるけものたち」, pp. 42-59. 築地書館.
- 飯室淳雄, 1975. は乳類の概況. 中村司編「山梨県の野生動物」, pp. 9-49. 山梨県自然保護課.
- 金井邦夫, 1988. 東京に生きる野生動物たち. らくだ出版.
- 金井邦夫, 1988. 高尾山の動物. 日本の生物, 2(9): 44-50.
- 中村一恵・石原龍雄・坂本堅五・山口佳秀, 1989. 神奈川県におけるハクビシンの生息状況と同種の日本における由来について. 神奈川自然誌資料, (10): 33-41.
- 中山和也・槐真史, 1989. 大磯のは乳類分布. 「丘陵の動物—生活史を中心に—」, pp. 25-21. 大磯町郷土資料館.
- Torii, H. & T. Miyake, 1986. Litter size and sex ratio of the masked palm civet, *Paguma ravata*, in Japan. *J. Mamm. Soc. Japan.*, 11(1/2): 35-38.
- 野生動物管理事務所, 1988. ハクビシン生息実態調査報告書.

(神奈川県立博物館)